

日本菌学会ニュースレター

Newsletter of the Mycological Society of Japan

2024-3 (7月)

目次

追悼	松嶋崇氏を偲んで: Takashi Matsushima (1930・2023).....	岡田 元	1
紹介	アルゼンチンで開催されたIWEMM11に参加して.....	山田明義	3
学会記事	理事会報告①.....		8
学会記事	理事会報告②.....		8
学会記事	理事会報告③.....		10
学会記事	理事会報告④.....		13
学会記事	会員消息.....		27



タモギタケ *Pleurotus cornucopiae* (Pers.) Roll. var. *citrinopileatus* (Singer) Ohira

鳥取県東部の最高峰（中国山地では大山に次いで2番目）である氷ノ山（ひょうのせん 1,510 m）は中国地方におけるタモギタケ（楡木茸）の貴重な発生地であり、それは2000年の日菌報41巻で報告されました。また「レッドデータブックとっとり」には絶滅危惧Ⅱ類として記載されています。昨年7月、生えている姿を一目見ておこうと思い、雨と霧に包まれた標高1,000 m付近の険しい渓谷に行きました。傘は開ききっていましたが、霧の

森で淡く浮かびあがるような薄黄色の綺麗な株に出会うことができました。雪深く厳しい環境のV字谷で数十年にわたり周辺の腐朽木から発生が続いていますが、そこは極めて狭い範囲です。今後基質の流失や登山道の整備などで絶えてしまわないことを願いつつ、本年も様子を見に行きたいと思います。

牛島秀爾（菌茸研究所・鳥取きのこ愛好会）

松島崇氏を偲んで : Takashi Matsushima (1930–2023)

岡田 元 (元 理化学研究所)



元日本菌学会会員の松島崇氏 (Fig. 1) は 2023 年 8 月 15 日に神戸の病院において、胆道癌による胆管閉塞と急性膵炎により、92 歳 11 ヶ月でご逝去されました。ここに会員の皆様にお知らせするとともに、謹んでお悔やみ申し上げます (英文追悼文は Hawksworth 2024 を参照)。ご子息の松島恵介氏によれば、崇氏は 7 月末に腹痛と黄疸のため自宅近くの医院を受診したところ、治療可能な病院を紹介されて急遽入院されましたが、検査後合併症の悪化が急速に進み、2 週間ほどで亡くられました。本学会の多くの会員がご存知のように、他の追従を許さない緻密な線画と鮮明な写真 (Fig. 2) を備えた独自の報告において、日本新産種や希少種はもちろんのこと、多くの新属新種を長年にわたり発表されました (Matsushima 1971, 1975 他; 多くが電子化済み; 参考文献を参照)。その結果、糸状菌類の分類学に対する松島崇氏の偉大な貢献は世界中の研究者の知るところとなり、同氏の業績をたたえた国内外の研究者により以下のような属名や種名に対する献名が行われました: *Matsushimaea* Subram. 1978, *Matsushimomyces* Rah. Sharma & Roh. Sharma 2015, *Matsushimiella* R.F. Castañeda & Heredia 2001, *Matsushimomyces* V.G. Rao & Varghese 1979, *Chalara matsushimae* McKenzie 2002, *Chloridium matsushimae* W. Gams & Hol.-Jech. 1976, *Curvularia matsushimae* Tsuda 2003, *Didymostilbe matsushimae* Seifert 1985, *Fusicladium matsushimae* (U. Braun & C.F. Hill) Crous et al. 2007, *Ramichloridium matsushimae* de Hoog 1977, *Sporidesmium matsushimae* S. Hughes 1979, *Triangularia matsushimae* (Udagawa & Furuya) Guarro 1988, *Trichoderma matsushimae* (Abdullah & J. Webster) K. Yamag. et al. 2012 など (Index Fungorum を参照)。

松島崇氏は 1952 年に国立衛生試験所 (現 国立医薬品食品衛生研究所) に勤務されてから菌類分類学の研究を開始され、その後東京大学、塩野義製薬株式会社 (塩野義) に移動され、さらに 1971 年には Matsushima Fungus Collection, Kobe (MFC*) を設立しました (Table 1)。MFC は長年にわたり塩野義からの援助を受けながら、松島氏により運営されました。バウチャーとしてのタイプ (顕微鏡用プレパラート、培養菌株の乾燥標本、発表用オリジナル図版) は MFC に、また分離菌株は塩野義で保管・保存されましたが、1995 年の阪神・淡路大震災 (大震災) により多くが失われたと伺いました (最近、タイプの一部が MFC で見つかり、確認作業を今後行う予定とのこと)。その後、松島恵介氏も塩野義に勤務され、同時に MFC に所属しながら崇氏をサポートし、自らも菌類の分類研究を行いました (参考文献を参照)。

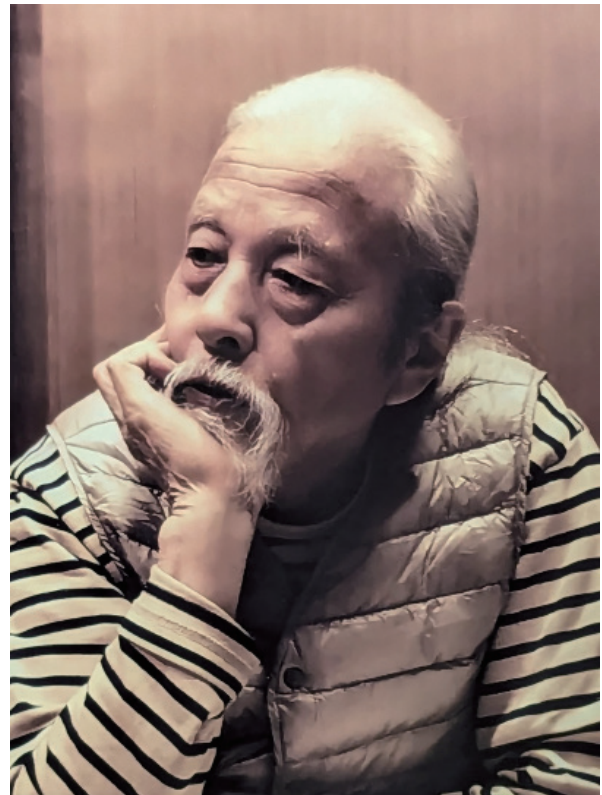


Fig. 1. Takashi Matsushima (1930–2023) photographed at home in 2018

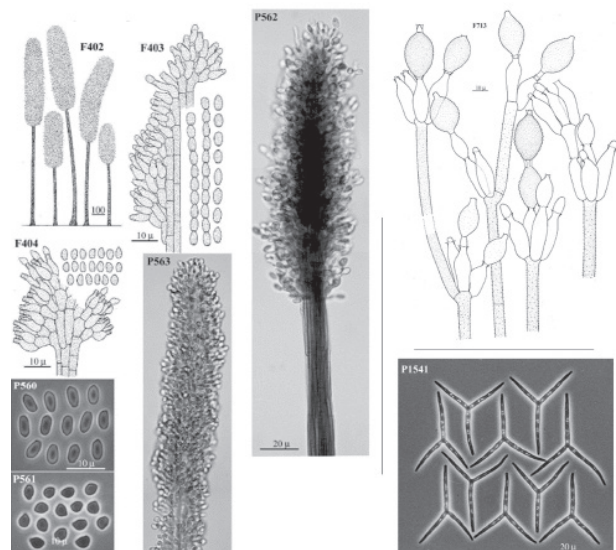


Fig. 2. Examples of the drawings and photos in Matsushima (1975; Electronic version, 2006)

Table 1. Biographic outline for Takashi Matsushima (1930–2023)

Year	Affiliation
1952	Graduated from School of Pharmacy, Kumamoto University, Kumamoto, Japan
1952–1962	National Institute of Hygienic Health Sciences, Tokyo, Japan
1958	Minnesota State University, Mankato, MO, USA
1962–1964	The University of Tokyo, Tokyo, Japan
1964–1975	Shionogi & Co., Ltd., Osaka, Japan
1971–2023	Matsushima Fungus Collection, Kobe, Japan

松島崇氏は日本のみならず世界中において広く菌類採集をされました：南太平洋, パプアニューギニア, オーストラリア, マレーシア, ボルネオ島, 中国, 台湾, インド, 南アフリカ共和国, ペルー, キューバ, アラスカなど。また, 国内外の著名な研究者の協力を得て, 研究活動を続けました：小林義雄, 椿 啓介, 倉田 浩, T.R. Nag Raj, A. Nawawi, R.H. Petersen, J.W. Carmichael など。大震災の後に松島氏がアメリカを訪れた際に, Petersen 博士に大変お世話になったことを感謝されていたそうです。奇しくも, 最初に勤めた職場の上司であった倉田浩先生も同じ 92 歳で (一戸 2014), また同僚であった宇田川俊一元日本菌学会会長も昨年 8 月に 92 歳で亡くなっておられます (Suzuki 2024)。

松島崇氏の写真 (Fig. 1) と個人情報 (Table 1 など) の提供ならびに Matsushima (1975; Electronic version, 2006) からの図版掲載許可 (Fig. 2) をいただきました松島恵介氏に深く感謝いたします。

参考文献

- Hawksworth DL (2024) MycoNews 2023: Editorial, news, reports, awards, personalia, and book news. IMA Fungus 15: 1. <https://doi.org/10.1186/s43008-024-00139-8>
- 一戸正勝 (2014) 倉田先生：倉田浩先生 (大正 11 年 – 平成 26 年) . 日菌報 55: 17
- Matsushima K, Matsushima T (1995) Fragmenta mycologica I. Matsushima mycological memoirs No 8, p 45–54 & Pl 90–120. Published by the authors, Kobe
- Matsushima K, Matsushima T (1996) Fragmenta mycologica II. Matsushima mycological memoirs No 9, p 31–40 & Pl 1–26. Published by the authors, Kobe
- Matsushima T (1971) Microfungi of the Solomon Islands & Papua-New Guinea. Published by the author, Kobe (Electronic version, 2006; some photographic illustrations and taxon index added)
- Matsushima T (1975) Icones microfungorum a Matsushima lectorum. Published by the author, Kobe (Electronic version, 2006; some photographic illustrations and taxon index added)
- Matsushima T (1980, 1982, 1983, 1985, 1987, 1989, 1993a, 1995, 1996, 2001) Matsushima mycological memoirs Nos 1 (1980), 2 (1982), 3 (1983), 4 (1985), 5 (1987), 6 (1989), 7 (1993), 8 (1995), 9 (1996), 10 (2001).

Published by the author, Kobe (Electronic version of the all volumes, 2005; orthographic and typewriting errors corrected, and many microphotographs and taxon index added)

- Matsushima T (1993b) List of microfungi from Pakistan soils. In: Nakaïke T, Malik S (eds), Cryptogamic flora of Pakistan, vol 2. National Science Museum, Tokyo, pp 43–63 (Revised electronic version, 2005; seven microfungi and many microphotographs added as well as many information on references and others)
- Matsushima T (2007) Index of Matsushima Mycology** (electronic version). Published by the author, Kobe
- Suzuki A (2024) Obituary Dr. Shun-ichi Udagawa (1931–2023). Mycoscience 65: MYCObituary23.3. <https://doi.org/10.47371/mycosci.MYCObituary23.3>

* MFC に関する連絡先：松島恵介, 〒 658-0047 兵庫県神戸市東灘区御影 3-2-5 (電子メール：kineosporia@gmail.com)

** Matsushima Mycology: Matsushima T (1971, 1975, 1980, 1982, 1983, 1985, 1987, 1989, 1993a,b, 1995, 1996, 2001)

E-mail: gokada@a.riken.jp (岡田 元)

アルゼンチンで開催された IWEMM 11 に参加して 山田明義 (信州大学)

本年4月21日から26日まで、アルゼンチンのエスケル市で開催された 11th International Workshop of Edible Mycorrhizal Mushrooms (第11回食用菌根性きのこに関する国際ワークショップ) に参加しましたので、その内容について紹介させていただきます。

IWEMM は、1996年にアメリカ合衆国のパークレーで開催された ICOM 1 (1st International Conference on Mycorrhizae) の中で設けられたワークショップが発端です。そして、1998年にスウェーデンのウプサラで開催された ICOM 2 に関連するプレワークショップ IWEMM1 として開催されました。さらに、2001年にオーストラリアのメルボルンで開催された ICOM 3 に先立ち、ニュージーランドのクライストチャーチで IWEMM 2 として独立開催されました。その後、カナダ・ビクトリア (3回, 2003年)、スペイン・ムルシア (4回, 2005年)、中国・楚雄 (5回, 2007年)、モロッコ・ラバト (6回, 2011年; 2010年にチリでの開催が予定されていたが地震被害のため中止)、グアテマラ・アンティグア (7回, 2013年)、フランス・カオール (8回, 2016年)、メキシコ・テスココ (9回, 2017年)、日本・諏訪 (10回, 2019年) と続いてきました。2020年には中国・昆明での開催予定でしたが、新型コロナウイルスの世界的な広がりにより中止となり、その次に候補としてあがっていたアルゼンチン大会が今回開催されることとなりました。なお、本ワークショップの2019年の日本での開催に際して日本菌学会から財政的支援をいただいたことに、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

さて、地球上で日本から一番遠い場所にあたる南米パタゴニアに位置するエスケル市には、何度か飛行機を乗り継いでいくことになります。私の場合は、成田～トロント (カナダ)～サンパウロ (ブラジル)～ブエノスアイレス (アルゼンチン)～エスケルと4回乗り継ぎし、片道足掛け3日を要しました (復路は日付の関係で足掛け4日)。円安もあって最短ルートのチケットは全く手を出せる額ではなく、若干時間のかかる旅程を選んだこともあります。まだ蒸し暑さのあるブエノスアイレスから1000 kmほど南下したエスケル市に到着すると、既に晩秋を思わせる黄葉の木々があり、アンデスの山々は白く、肌寒さを感じる天候でした。ブエノスアイレスからエスケルへの飛行機は1日1便のため知己の研究者らも多数乗っており、飛行機から降りるとすでにワークショップ会場のような雰囲気もありました。21日夕刻にワークショップの受付を済ませ、ウェルカムパーティーには参加せずホテルに入りました (写真1)。

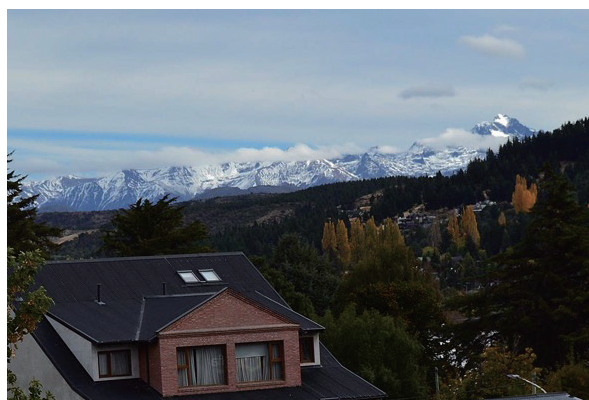


写真1. エスケルのホテルから見たアンデスの山並み

大会2日目の22日午前9時より開会のセレモニー、そして口頭発表へと移りました (写真2)。本ワークショップでは、分類、生態、生理、代謝、化学分析などの研究成果の発表するセッションもありますが、複数の領域にまたがる発表や地域経済・食文化を織り込んだ発表も少なくないため、他の学会大会等に比べて質疑の幅も広く、討論の素地も多分にあります。かつ、ラテンアメリカという場のせいもあってか、スケジュールは伸び伸びで、いつ始まりいつ終わるのがなかなか読めない大会でもありました。



写真2. 開会式の一コマ。左から2番目の女性が実行委員長の Carolina Barroetaveña 博士

大会3日目 (23日) の昼から午後にかけては、街から車で1時間弱の山域にある人里に近い山地に広がるナンキョクブナの林分を散策するツアーが組まれました。この林分には紅葉する種と黄葉する種の少なくとも2種のナンキョクブナが茂っていました (アルゼンチンには5種が分布するそうです)。シーズンは終わりかけているものの樹上に発生しているキタリアの様子 (写真3)、外



写真3. ナンキョクブナの幹から発生したキッタリアの子実体（古くてやや乾燥している）



写真4. *Austropaxillus* の子実体。傘表面は黄色～黄土色で、組織を傷つくとやや紫変する

生菌根を形成する *Austropaxillus* の子実体発生（写真4）、倒木が総じて褐色腐朽を呈するなど、北半球の広葉樹林の様子との違和感が大変新鮮でした。

散策地からは、チリ側に向けて幾重にも連なる雪を被ったアンデスの山々、そしてアルゼンチン側には緩やかな起伏と広大な平原が広がり、まさにパタゴニアの地を実感しました（写真5）。山中の小さなレストランで午後2時過ぎに昼食を摂り、その後会場に戻って午後のセッションが始まりました。全ての発表が終わると午後8時を過ぎているという、なかなかハードなスケジュールでした。



写真5. 散策地からの眺め

大会4日目（24日）は今回の目玉とも言える、Los Alerces National Park（ロス・アレルセス国立公園）のトレイル散策でした。ここは、チリとの国境に近いアンデス山脈の中にあり、山頂はすでに雪に覆われ、山麓は氷河に削られた谷底を中心にナンキョクブナとヒノキ科の大木が茂るパタゴニア特有の原生林が発達しています。エスケル市街を午前8時過ぎに出発し、午前10時頃から午後3時近くまで、小雨の降る寒い天候のもとで、原生林のトレイル沿いにてきのこの発生を観察しました（写真6）。全体的に種類はそれほど多くないものの、フウセンタケ属（広義の旧分類群）だけは様々な種があちこち群生しており、今までに見たことのない不思議な景観でした（写真7）。次によく見られたのは、キシメジ属とテングタケ属でしたが、それぞれ2-3程程度でフウセンタケ属に比べると発生頻度はぐっと少ない感じでした。セコチオイド型のフウセンタケ科系統（写真8）や *Austropaxillus* も散見され、この地域でよく知られている黄色系のホウキタケ属種も1回だけ観察できました（写真9）。しかし、北半球ならどこにでもいそうなベニタケ属、キツネタケ属、アセタケ属などは、全く見られませんでした。また、木材腐朽では、タコウキン類があまり見られず、多くはコウヤクタケ類でした。林床の腐生菌もあまり多くはない印象で、クヌギタケ属とクリタケ属が見られたくらいでした。ほかに興味深いこととして、外来種のベニテングタケが1本生えていました。これは、公園内にかつて植栽されたマツ科のもとで発生したベニテングタケの胞子が飛散し原生林内でナンキョクブナの根系に定着してしまったとのことでした（写真10）。この公園では、原生林内でベニテングタケが見つかり次第、子実体を抜き取るとともに直下の土壌も掘り取り、徹底的に駆除しているという説明でした（写真11）。

このトレイル散策に関しては事前に雨と寒さならびに山歩きへの対策がアナウンスされてはいましたが、皆濡れて体も冷え、行動食として渡されていたサンドイッチとリンゴを食べてもなかなか大変な状況でした。ですが、このあと、トレイルの到達点に待機していたバスに乗ると、ほどなくバーベキューレストランに到着しました。そして、薪ストーブもある暖かい建物の中で2時間を超



写真6. チャワシタケ目の子実体を撮影する筆者。IWEMM 11の事務的な運営を担ったCIEFAP（アンデス・パタゴニア林業研究普及センター）のWebサイトより転載



写真7. 広義のフウセンタケ属

える盛大なバーベキュー（グリルした骨付きのアルゼンチン牛と牛肉のチョリソー）のランチとなり、皆さん寒さと疲れも吹き飛んだようです。ラテン系のノリであちこちワインの乾杯が繰り返され、途中から生演奏が始まるなど、さながらパーティーでした。この日は、会場に



写真8. セコチオイド型のフウセンタケ科系統。上：子実体の全景で、傘表面が食害を受けて子実層と胞子が露出している。下：傘と柄の表面を構成する菌糸体組織がつながっている



写真9. ホウキタケ属種

戻り夕刻からポスター発表の予定でしたが、帰りが6時を過ぎるのでそれを中止するという大胆な予定の変更もありました。

こうしたハードスケジュールの中で、大会5日目(25日)の朝9時から私の発表が組まれていましたが、開始時刻は参加者の集まりを見て20分以上遅れました。発表は質疑も含めて計40分程度だったかと思いますが、まじめに時間を守ったプレゼンになっていたはずですが、本ワークショップの発表者の内訳はトリュフが7-8割を占めるため、私のマツタケやアンズタケに関する研究発表は珍しい部類に入り、参加者にとっては普段あまり聞くことの



写真10. 原生林の様子



写真11. ペニテングタケの子実体

ない話に興味深かったのではないかと考えている次第です（毎回そんな感じですが）。この日の午後、フランスにあるトリュフ菌根苗の生産会社の最大手である Robin 社による興味深い発表がありました（写真12）。会社設立から75年の歴史を振り返る内容で、設立者の孫にあたる方が大変よく話をまとめられていました。この日も少しずつ予定が遅れたものの午後6時には一般発表が終わり、午後7時過ぎにはチャーターバスに乗って大会のもう一つの目玉であるガラディナー（懇親会）に出かけました。郊外のレストランで行われたガラディナーは8時過ぎから始まったかと思いますが、メインディッシュが出てきたのは10時過ぎでした。その後、ダンスが始まり、DJもいて大音量の音楽で盛り上がり、さながらクラブ状態



写真12. Robin 社による発表。左が Robin 氏

でした。12時をまわった頃に最後のスイーツが出され、クレープ生地にもまれたイチゴソースの中にはキッタリアが入っていました（写真13）。ダンスと音楽が終わり、帰路のバスに乗ったのが午前2時近く、エスケルの街に戻ってバスを降りると午前2時半でした。「アルゼンチン恐るべし」と感じた一日でした。

最終日の大会6日目（26日）も朝9時からの予定が組まれていました。私は10時近くから参加しましたが、まだ最初の演者がプレゼンをしていたので、開始は相当遅れていたはずですが、さすがに最終日は質疑も少し静かになっていました。昼にかけて、地元の10～16歳の子供たちによる伝統楽器を交えた演奏などもあり、南米にいることを改めて感じました（写真14）。午後5時にはす



写真13. キッタリアの入ったスイーツ。キッタリアの外観（上）と断面（下）



写真14. 地元の子供たちによる演奏

すべての一般講演が終わり、最後のセッションで次回大会候補地のプレゼンとその開催案の賛否確認、今後の大会の進め方などについて協議がありました。実は、前回の日本大会では、次の開催地として中国が強く希望してプレゼンに臨んだことに異論（なぜ隣国でそれも翌年に開催するのかという反対意見）が唱えられて議論が紛糾し、全体合意が得られないという大変な事態になりました（今となっては懐かしいのですが）。今回は、スペインが事前に根回しをし、他に候補国もなく、スムーズに事が運びました。また、スペイン大会後も、大会ごとに開催地の大陸（地域）を変更し、世界各地で開催していくという点を確認しました。その後、この会でアミガサタケなどの非菌根性の野生食用きのこを今後どのように取り扱うのか（発表枠として）、栽培きのこをどうするのかといったことも議論されましたが、本ワークショップの名前は保持し、現行の（あまり厳しい制約を設けない）体制を維持していこうということで大筋合意に至りました。そして、午後6時過ぎ、また3年後の2027年にスペインということで、三三五五お開きとなりました。

今回の会場となったエスケル市はアンデス山脈の山麓に位置する小さな街で、冬はスキーリゾートとして賑わうようです。大会6日目の朝には街が一面雪に覆われ、終日雪の天気でした（写真15）。また、今回の開催地はどこから参加しても比較的遠方であることや、新型コロナ後に開催される最初の会ということもあってか、参加国数も15程度とやや少なく参加者総数も100名には遠く及ばない状況でした。ですが、アルゼンチン女性陣の元気で賑やかな司会進行もあり、大変活況で興味深い大会でした。日本からはあにく私一人、中国、ニュージーランド、エチオピアからも一人ずつ、その他はスペイン、イタリア、フランスを中心とした欧州と北中南米の各国からの参加という状況でした（写真16）。参加者にやや固定化が見

られるため、若い世代にどんどん参加してほしいという、日本ではよく耳にする話が地球の裏側でも話題になりました。このIWEMMは、菌根の研究を中心としてつ食利用や食文化までをカバーし、かつ地球環境問題や社会問題についても議論する稀有なワークショップと言えます。論文書きに直結する研究の流行や関係者とのコンタクトを求めて参加する国際会議に少し物足りなさを感じている人にとっては、少し違った視点や概念にアクセスできるよい場ではないかと思います。また、エクスカーションでは、一般の旅行ではなかなか辿り着くことのできない場所を見て回ることもできます。ごんまりとしたワークショップなので学生一人で参加しても温かく迎えてくれます。英語圏以外の地域からの参加者が多いため、私のような英語音痴でもなんとかついていけるのも有難い点です。ぜひ3年後のスペイン開催には、菌学会から一人でも多くの方に参加いただければと思います。

E-mail: akiyosh@shinshu-u.ac.jp (山田 明義)



写真15. エスケル市街中心部の雪景色



写真16. エスケル市街のメインストリートで撮影された参加者の集合写真。CIEFAPのInstagramより転載

8 ～ 28 ページは『会員限定記事（印刷版限定）』

日本菌学会ニュースレターは年4号発行され、学会会員と賛助会員まで送付されます。発行部数は1,300部です。また、常時投稿記事を募集しております。ご意見、ご不明の点などございましたら下記の編集委員までご連絡下さい。

日本菌学会ニュースレター編集委員長(2023-2024年度)
小泉敬彦 東京農業大学
tk208124@nodai.ac.jp

同編集委員

牛島秀爾 日本きのこセンター菌茸研究所
kin-ushis@infosakyu.ne.jp
北出雄生 森林総合研究所九州支所
y.kitade3335@gmail.com
服部友香子 森林総合研究所
hattori31@ffpri.affrc.go.jp
蓑島綾華 神奈川県農業技術センター
ayakaminoshima45@gmail.com
吉田裕史 岩手生物工学研究センター
h-yoshida@ibrc.or.jp

一般社団法人日本菌学会会長(2023-2024年度)

細矢 剛(国立科学博物館)
〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

副会長

玉井 裕(北海道大学)

理事

折原貴道(庶務担当;神奈川県立生命の星・地球博物館)
清水公徳(編集委員長;東京理科大学)
白水 貴(広報・企画・教育・普及[HP]担当;三重大学)
辻田有紀(庶務担当;佐賀大学)
出川洋介(広報・企画・教育・普及担当;筑波大学)
平野達也(国内集会担当;日本樹木医会)
廣岡裕吏(国際集会担当;法政大学)
星野 保(国内集会担当;八戸工業大学)
本橋慶一(会計担当;東京農業大学)
山田明義(日本菌学会会報編集責任者;信州大学)

日本菌学会ホームページ
<http://www.mycology-jp.org/>

速報性の必要なイベント情報の掲載などは学会ホームページ担当(secretary-general@mycology-jp.org)までお問い合わせ下さい。その他、学会運営等に関しては、上記まで適宜お問い合わせ下さい。

日本菌学会では、随時、会員を募集しております。広い意味での菌類(地衣、粘菌なども含む)に興味をお持ちの研究者ならびに愛好家の方など、どなたでもご入会いただけます。学会への入会方法は、ホームページをご覧ください。また、賛助会員についても募集しております。

編集後記

ニュースレターの編集委員を引き続き務めさせていただいております。2期目となりますが、今期もどうぞよろしくお願いいたします。

私も異動して1年が経ち、だんだんと県内の現場の方々にも存在が認知され始め、農作物の生育障害に関する診断依頼を受けることが多くなりました。学生の時には、様々な県の方々のご縁に恵まれ、各地へ飛び廻りながら様々な植物病害を診させていただきました。現在は、その貴重な経験を生かして、現場の役に立てるように精進する毎日です。ただ、毎年気候も変化し、発生する障害も多種多様で原因の特定はなかなか難しく、頭を抱えることが多くなっています。もちろん菌類も環境要因に大きく影響されており、昨年は暖冬だったからか、ダイコンの白さび病の発生が例年より少なく、依頼されていた試験ができるかヒヤヒヤしながら毎日を過ごしていました。このような環境変化により、今まで見られなかったような未知の病原菌も今後増えていくだろうと予想されますので、未知の菌類に出会えるワクワク感を密かに楽しみながら(あまり大きな声では言えませんが)、引き続き頑張りたいと思います。

(編集委員 蓑島綾華)

5月中旬に青森県八戸市で開催された第68回大会に参加しました。自宅から会場まで徒歩30分ほどだった前回大会とは打って変わり、日本の南西部から北東部へ8時間ほどの移動となりました。自身の発表に関して、先生方からご意見等をいただくことができ、大変勉強になりました。また、九州に戻ってからLINC Bizで他会場の講演も視聴することができ、充実した学会でした。久しぶりに開催された懇親会では、かつてのように会場が熱気であふれ、どことなく懐かしい気持ちになりました。また、街中や飲食店で偶然お会いした先生方や学生さんとその場で合流し、海鮮と日本酒を楽しみながら意見交流できたのも、学会ならではの感じました。今回、八戸といえば朝市ということで朝食も楽しみにしていました。残念ながら館鼻岸壁朝市はうみねこマラソンのため休業していましたが、陸奥湊駅前朝市で新鮮な海鮮を味わうことができました。今回はハードな旅程のため、八甲田山、白神山地、奥入瀬溪流といった青森県の森林を訪れる余裕がなかったのが唯一心残りです。次回大会ではどんな方々と交流できるのか、また、どんな地元の魅力と触れ合えるのか、早くも楽しみです。

(編集委員 北出雄生)

Volume 65, Issue 2 (2024)

Available online at: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/mycosci/-char/ja>

Contents

Obituary Dr. Shun-ichi Udagawa (1931-2023)

Akira SUZUKI

- N** Re-epitypification of *Neofusicoccum laricinum*
Yukako Hattori, Chiharu Nakashima, Hayato Masuya 47–48
- FP** *Amanita satotamagotake* sp. nov., a cryptic species formerly included in *Amanita caesareoides*
Miyuki Kodaira, Wataru Aoki, Naoki Endo, Daisuke Sakuma, Eiji Hadano,
Atsuko Hadano, Yasushi Hashimoto, Seiki Gisusi, Kohei Yamamoto,
Ryo Sugawara, Masaki Fukuda, Akiyoshi Yamada 49–67
- FP** Variable, life stage-dependent mycorrhizal specificity and its developmental consequences in the fully myco-heterotrophic orchid *Cyrtosia septentrionalis*
Hidetaka Umata, Stephan W. Gale, Kenji Suetsugu, Yuko Ota 68–78
- SC** *Gymnosporangium mori* comb. nov. (*Pucciniales*) for *Caeoma mori* (\equiv *Aecidium mori*) inferred from phylogenetic evidence
Taiga Kasuya, Kentaro Hosaka, Jing-Xin Ji, Makoto Kakishima 79–85
- SC** Ecological aspects of myxomycetes associated with white and brown wood rot on coarse woody debris in subalpine coniferous forests in Central Japan
Kazunari Takahashi, Yuichi Harakon, Yu Fukasawa 86–91
- SC** *Septoria cannabicola*, a new species on *Cannabis sativa* from Japan
Anysia Hedy Ujat, Shinju Konishi, Yurina Kato, Hana Tonami, Chiharu Nakashima 92–95
- FP** Identification of the oosporein biosynthesis gene cluster in an entomopathogenic fungus *Blackwellomyces cardinalis*
Yosuke Nakamura, Ngoc-Hung Nguyen, Tomoya Yoshinari, Masakazu Hachisu,
Phuong-Thao Nguyen, Kiminori Shimizu 96–104

RV Review

FP Full Paper

SC Short Communication

N Note

Volume 65, Issue 3 (2024)

Available online at: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/mycosci/-char/ja>

Contents

- | | | |
|-----------|--|---------|
| SC | <i>Coltricia raigadensis</i> (<i>Hymenochaetaceae</i> , <i>Basidiomycota</i>), a new species from India
Prashant B Patil, Sharda Vaidya, Satish Maurya, Lal Sahab Yadav | 105–110 |
| FP | Two new <i>Mycena</i> section <i>Calodontes</i> species: One newly discovered and the other new to Japan
Kosuke Nagamune, Kentaro Hosaka, Shiro Kigawa, Ryo Sugawara,
Kozue Sotome, Akira Nakagiri, Naoki Endo | 111–122 |
| FP | Myxomycetes on the bark of living <i>Metasequoia glyptostroboides</i> trees and their distribution along a rural-urban gradient
Kazunari Takahashi | 123–132 |
| SC | New species <i>Pythium amaminum</i> sp. nov. isolated from river water on Amami Island in Japan
Hina Kikuchi, Ayaka Hieno, Haruhisa Suga, Hayato Masuya, Seiji Uematsu,
Koji Kageyama | 133–137 |
| FP | The co-dispersal strategy of <i>Endocarpon</i> (<i>Verrucariaceae</i>) shapes an unusual lichen population structure
ChunYan Yang†, QiMing Zhou†, Yue Shen, LuShan Liu, YunShu Cao, HuiMin
Tian, ShuNan Cao, ChuanPeng Liu | 138–150 |
| SC | <i>Cystoderma yongpingense</i> sp. nov. (<i>Squamanitaceae</i> , <i>Agaricales</i>) a new species from southwestern China
Yun-Li Feng, Da-Feng Sun, Yuan Fang, Rong Hua, Shao-Xiong Liu, Ming Ma,
Xiang Guo | 151–155 |

RV Review

FP Full Paper

SC Short Communication

N Note

日本菌学会賛助会員

(株) 秋山種菌研究所

〒 400-0042 甲府市高畑 1-5-13
Tel 055-226-2331 Fax 055-226-2332

(株) キノックス

〒 989-3126 仙台市青葉区落合 1-13-33
Tel 022-392-2551 Fax 022-392-2556

(株) 千曲化成

〒 389-0802 千曲市内川 1101
Tel 026-276-3355 Fax 026-276-6182

TK 製薬 (株)

〒 337-0024 埼玉県さいたま市見沼区片柳 412-1
Tel 048-686-1828

(一財) 日本きのこ研究所

〒 376-0051 桐生市平井町 8-1
Tel 0277-22-8165 Fax 0277-46-0906

(株) 富士種菌

〒 400-0226 南アルプス市有野 499-1
Tel 055-285-3111 Fax 055-285-3114

ホクト (株)

〒 381-0008 長野市大字下駒沢 800-8
Tel 026-296-3211 Fax 026-296-1465

(株) 北研

〒 321-0222 栃木県下都賀郡壬生町駅東町 7-3
Tel 0282-82-1100 Fax 0282-82-1119

三菱ケミカル (株)

〒 227-8502 横浜市青葉区鴨志田町 1000
Tel 045-963-3601 Fax 045-963-3976

森産業 (株) 研究開発部

〒 376-0051 桐生市平井町 8-1
Tel 0277-22-8168 Fax 0277-40-1557

(株) 雪国まいたけ 研究開発部

〒 949-6695 南魚沼市余川 89
Tel 025-778-0153 Fax 025-778-1282

(2024年6月現在)

投稿案内 (令和3年4月1日改訂)

日本菌学会ニュースレターは、会員への様々な情報提供と会員相互の交流を図ることを目的に、年4回(1月、3月、7月、9月)発行されます。学会運営サイドからの報告や最新情報のアナウンスとともに、会員からの投稿による菌類全般に関する資料、研究レポート、報告、紹介、随想、解説、表紙写真(線画・イラストを含む)などを掲載します。投稿にあたっては、次のことを遵守してご執筆下さい。

1. 原稿はワープロソフト (MS Word, テキストエディタなど) を用い、A4 版用紙を縦長に、上下左右を 2.0 cm 以上空けて、横書きで作成して下さい。図表・写真についても、可能な限り別の電子ファイル (EPS, TIFF, JPEG, BMP などの画像ファイル、あるいは Adobe Photoshop (PSD), Illustrator (AI)) をご用意下さい。
2. 原稿は、電子メールの添付ファイルにてお送り下さい。投稿に際しては、必要事項を記入した著作権譲渡書および投稿票を添付して下さい。電子メール投稿時の標題は、NL-#### (#### は投稿者の姓のローマ字表記; 山田なら NL-Yamada) として下さい。電子ファイルが比較的大容量の場合には、送付方法について予めご相談下さい。投稿料は不要です。
3. 原稿作成にあたっての注意点: できるだけ簡潔な文章で作成して下さい。口語的な表現、難しい言い回しや一般的でない漢字、特殊な専門用語は避けて下さい。**アラビア数字および英字は半角に統一して下さい。句点は全角ピリオド「.」、読点は全角カンマ「,」、日本語の文中での括弧は全角「()」で入力して下さい。**いずれの原稿も、体裁や文体の変更、内容の修正、投稿雑誌の変更などについて、編集委員会から指示がなされる場合があります。
4. 資料・研究レポートは原則として刷り上がり 5 頁 (原稿ベースで 10 枚程度) 以内、紹介・随想・解説は刷り上がり 3 頁 (原稿ベースで 6 枚程度) 以内とします。超過頁の可能性がある場合には、予め編集委員長までお問い合わせ下さい。
5. 図表(写真を含む)は白黒で印刷されますが、ホームページ掲載分 (PDF 版) はカラー対応が可能です。写真の場合には、できるだけカラー版をご用意下さい。図表の枚数は特に制限しませんが、本文と図表を合わせて制限頁内に収まるようご調整下さい。原稿の右欄外に、図表の挿入位置を示して下さい。また、誌面の都合ですべての図表を掲載できない場合があります。
6. 資料・研究レポートは幾つかの節に分け、太字の小見出しをつけて下さい。菌のリストを含む原稿の場合、原稿に使用した標本は博物館等に寄託して下さい。また根拠にした図鑑名を示して下さい。引用文献は最小限に留め、例に従って記述して下さい。
7. 和名は学会推奨和名を使用して下さい。また、新和名を提唱する場合は、データベース委員会の提言・勧告 (日菌報 49:99-101, 2008) を参照して下さい。

8. 編集委員会による編集・校正後、著者校正をお願いします。受け取り後、48 時間以内に校正しご返送下さい。別刷りは原則的に受け付けておりませんが、ご希望の方は編集委員までお問い合わせ下さい。

9. 支部、談話会、同好会などの会合、研修会、観察会の開催予定、各地の博物館などで開催される展示会などの情報も随時受け付けます。ただし、各号発行日の 1 ヶ月前までに到着するようご注意ください。

10. 掲載された資料、研究レポート、報告、紹介、随想、解説、表紙写真、その他の著作権は、オンライン配布を含み、本学会に所属します。

11. 記事は原則として、クリエイティブ・コモンズ表示・非営利 (CC BY-NC 4.0) の条件下で掲載されます。ただし、著者全員の合意があれば、表示・非営利・改変禁止 (CC BY-NC-ND 4.0) も選択できます。

12. 引用文献の表記等その他詳細は、日本菌学会会報の投稿規定、投稿細則に準じます。

引用文献の表記例 (ローマ字アルファベット順)

i. 雑誌

Hyde KD, Chalermpongse A, Boonthavikoon T (1990) Ecology of intertidal fungi at Ranong mangrove, Thailand. *Trans Mycol Soc Jpn* 31:17-27

池ヶ谷のり子・後藤正夫 (1988) シイタケ菌の子実体形成に及ぼすフェノール物質の硬化. *日菌報* 29:401-411

ii. 単行本

全体引用:

Domsch KH, Gams W, Anderson T-H (1980) *Compendium of soil fungi*, vol 1. Academic, London

原田幸雄 (1993) キノコとカビの生物学. 中央公論社, 東京

部分引用:

Cooke RC, Rayner ADM (1984) Ecology of saprotrophic fungi. Longman, London, pp 305-320

渡邊恒雄 (1993) 土壤糸状菌. ソフトサイエンス社, 東京, pp 82-109

章の引用:

Sagara N (1992) Experimental disturbances and epigeous fungi. In: Carroll GC, Wicklow DT (eds) *The fungal community*, 2nd edn. Marcel Dekker, New York, pp 427-454

徳増征二 (1983) 落葉生菌類. 菌類研究法 (青島清雄ら編). 共立出版, 東京, pp 107-116

iii. 国際学会の要旨集あるいはプロシーディングス

Kirkpatrick B, Smart C (1994) Identification of MLO-specific PCR primers obtained from 16S/23S rRNA spacer sequences. 10th International Congress of the

原稿の送付先

日本菌学会ニュースレター編集委員長 小泉敬彦

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1

東京農業大学生命科学部

Tel: 03-5477-3191

E-mail: tk208124@nodai.ac.jp

日本菌学会ニュースレター投稿票

メール本文または添付ファイルにて投稿票をお送り下さい。

題名：

投稿者名：

連絡先：〒

電話：

電子メール：

投稿区分（○で囲んで下さい）：資料 研究レポート 報告 紹介 随想 解説 書評 表紙写真（イラストも含む）
その他（ ）

その他，要望等：

※ご投稿いただいた記事は原則として、クリエイティブ・コモンズ表示・非営利（CC BY-NC 4.0）の条件下で掲載されます。ただし、著者全員の合意があれば、表示・非営利・改変禁止（CC BY-NC-ND 4.0）も選択できます。表示・非営利・改変禁止をご希望される場合は「その他，要望等」欄にその旨をご記入ください。

日本菌学会ニュースレター 2024 年 3 号

令和 6 年（2024 年）7 月 1 日

編集者 小泉敬彦

発行人 細矢 剛

印刷所 勝美印刷株式会社

〒 113-0001 東京都文京区白山 1-13-7

アクア白山ビル 5 階

Tel. 03-3812-5201（代表）

発行所 一般社団法人 日本菌学会

〒 113-0001 東京都文京区白山 1-13-7

アクア白山ビル 5 階